

4. 本園の本質的価値

4 - 1 本質的価値の明示

本園の本質的価値とは、芸術上・観賞上の価値、歴史上・学術上の価値等を示すものである。歴史的変遷を踏まえ、以下に本園の本質的価値を整理する。

(1) 回遊式の後樂園と御殿の内庭から成る、江戸の大名庭園として現存する最古の庭園

江戸初期、水戸藩初代藩主頼房は作庭に適した土地を求め、元々沼地だったこの地を選び、3代將軍家光の援助により神田上水を園内に通し、大泉水を中心とする回遊式庭園を造った。本園は、明暦の大火後に江戸の市街の構造が変化する以前に造られた庭園であり、江戸の大名庭園として現存する最古のものである。また、回遊式庭園としての形式は、後に造られる大名庭園に影響を与えた。

本園は、回遊式庭園である後樂園と、かつて水戸徳川家の主殿の庭だった内庭から成る。後樂園は、唐門により内庭と明確に分けられ、藩邸の中で独立した空間として保存されてきた。戦災による唐門の焼失に伴い、内庭と後樂園の物理的な隔たりが失われ、復元するまでは往時の観賞はできないものの、現存する唐門跡の遺構を通じ、作庭当時の本園の基本構成を窺うことができる。

(2) 変化に富む地形を利用した日本庭園に、中国の景勝地や儒教思想を表した景を取り入れた庭園

本園は、池や山、河川や田園等、変化に富んだ地形や景観から成る庭園である。内庭から唐門を経て後樂園に入り、薄暗い木曾路を抜けると広がる大泉水の雄大な景は人々を圧倒する。京都の大堰川や清水観音堂、唐崎の一つ松等、日本各地の景勝を模した景や、2代藩主光圀が民の辛苦を学ぶためにつくった田園の景等、変化に富んだ景観を観賞することができる。

さらに、光圀の代に中国より渡来した儒学者の朱舜水是、庭園に様々な影響をもたらした。先憂後樂から名付けた「後樂園」という名称、得仁堂、八卦堂等は儒教思想や文化を反映しながら表現したものであり、円月橋は当時の中国の土木の最新技術を駆使して造られた。

回遊式庭園の完成度の高さとともに、藩主の思想や教養等を伝える貴重な庭園である。

(3) 水戸藩から陸軍、東京市へと所有・管理者が変遷しつつも、その本質が継承されている庭園

江戸の大名庭園は明治時代になると、財閥や皇室の所管となり、庭園として継承されたものがある一方、官庁や軍の敷地となり消失していったものもあった。その中で、本園は陸軍省の所管となりながらも庭園の価値が認められ、保存・継承された。

明治初期、藩邸の屋敷部分を中心として砲兵工廠が建設され、庭園も改廃の危機に直面するが、当時の陸軍卿であった山縣有朋らのはたらきかけにより本園は保存された。本園には、行幸・行啓や、多くの海外貴賓が訪れたことから、迎賓の場として庭園を最良な状態に保つため、軍による修繕、改修等が行われた。その後、関東大震災により被害を受けた箇所を陸軍が復旧し、昭和になり東京市に引き継がれた。

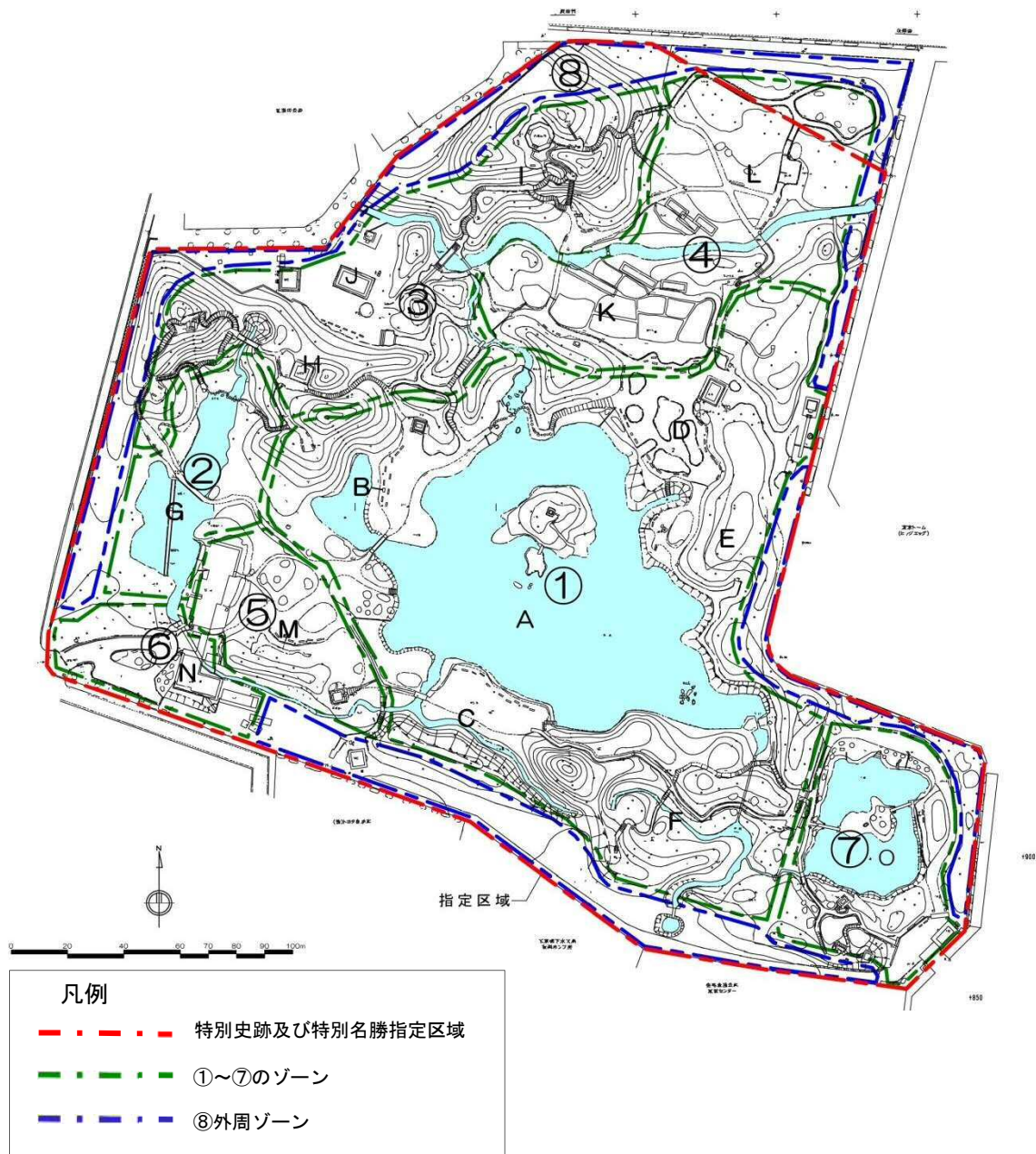
このように、本園は所有者・管理者の変遷や災害等を受けながらも、庭園としてその本質が継承され、都立庭園となった現在も多くの来園者に親しまれている。

4 - 2 庭園の価値を構成する要素

平成 22 年度改定の「東京都における文化財庭園の保存管理計画」（以下、保存管理計画という）では、本園の特色に基づき、図 2-64 のように、8 つの景観ゾーン及び A～O の地区に分けた。

本園の「本質的価値を構成する要素」を景観ゾーンに分けて表 2-3 に整理した。また、本園の維持管理や運営上必要である要素を「本質的価値を構成する要素以外の要素」として、表 2-4 に整理した。ここでは庭園の価値を構成する要素として動植物と水についても付加する。

図 2-64 景観ゾーン及び地区区分図



- ①大泉水とその周辺の景観ゾーン ②通天橋・大堰川・渡月橋・西湖の堤を結ぶ河川の景観ゾーン
- ③清水観音堂・小廬山・得仁堂・円月橋・愛宕坂・八卦堂・小町塚等の山中の景観ゾーン
- ④稲田・菖蒲田・梅林等東北部一帯の田園の景観ゾーン ⑤芝生広場(涵徳亭側庭門内広場)の景観ゾーン
- ⑥入口広場(涵徳亭側庭門外広場)の景観ゾーン ⑦内庭の景観ゾーン ⑧外周ゾーン

東京都における文化財庭園の保存活用計画（小石川後樂園）

表 2-3 本園の本質的価値を構成する要素

ゾーン	要素
① 大泉水とその周辺の景観ゾーン	地形: 木曾川・寝覚の滝、白雲嶺、大泉水、蓬莱島、龍田川、蓮池、白糸の滝、大黒山
	護岸・石組・石段: 船着場、竹生島、鳴門、徳大寺石、大泉水護岸
	植栽: 紅葉林、枝垂桜、一つ松、松原、棕櫚山
	建造物・石造物: 弁財天、帛橋（幣橋）、駐歩泉碑、石橋、丸屋、九八屋、赤門、異形燈籠、瘞鷄碑
	遺構: 唐門跡
② 通天橋・大堰川・渡月橋・西湖の堤を結ぶ河川の景観ゾーン	地形: 大堰川・沢渡り
	護岸・石組: 屏風岩、音羽の滝、西湖の堤
	建造物・石造物: 桃山形燈籠、渡月橋、通天橋
③ 清水観音堂・小廬山・得仁堂・円月橋・愛宕坂・八卦堂・小町塚等の山中の景観ゾーン	地形: 琉球山（富士山）、小廬山
	石段・石組: 愛宕坂、小町塚
	建造物・石造物: 得仁堂、円月橋、立ち手水鉢
	遺構: 清水観音堂跡、萱門跡、八卦堂跡
④ 稲田・菖蒲田・梅林等東北部一帯の田園の景観ゾーン	護岸・石組: 神田上水護岸、不老水
	植栽: 菖蒲田・稲田、藤棚、梅林
	建造物・石造物: 八つ橋、石橋
	遺構: 神田上水跡、琴画亭跡、酔月亭跡
⑤ 芝生広場（涵徳亭側庭門内広場）の景観ゾーン	地形: 芝庭
	石組: 枯滝、陽石、陰石、水掘れ石
	建造物・石造物: 飾手水鉢、涵徳亭
	遺構: 西行堂跡、雪見燈籠跡
⑥ 入口広場（涵徳亭側庭門外広場）の景観ゾーン	石造物: 鉄鉢型手水鉢
⑦ 内庭の景観ゾーン	地形: 内庭中島、内庭池
	護岸: 内庭池護岸
	石造物: 石橋
	遺構: 旧東門跡

表 2-4 本園の本質的価値を構成する要素以外の要素

分類	要素
植栽	本質的価値を構成する植栽（表 2 - 3）以外の植栽
建造物、構造物、石造物	錦春稲荷、富士見台、藤田東湖鋼製碑、砲兵工廠記念碑、藤田東湖石碑
公開・活用施設	掲示板、案内板、解説板（植生浄化水路）
休養施設	縁台、団体休憩所
便益施設	便所、水飲場
管理施設	給排水管、電気通信管、ロープ柵、給水ポンプ、ごみ箱、竹柵、放水銃、涵徳亭門（西門）、管理用門扉、正門（東門）、北門、植生浄化水路、分電盤
管理運営のための建物	管理所、倉庫、詰所、資材置場、作業小屋、集積所

① 大泉水とその周辺の景観ゾーン

1) 唐門跡

後樂園と内庭との境界に位置し、現在は基壇と石段が残るだけである。唐門は華やかな極彩色の彫刻を持った唐様式の門であり⁷⁾、後樂園と銘された扁額のある後樂園への正式な入口であった²⁾。唐門の存在により、後樂園と内庭の関係が明白になる。来園者には内庭から後樂園の境界を際立たせる。江戸時代には、唐門から後樂園に入れる機会は限られており⁷⁾、江戸大名庭園の中で本園を際立たせる特徴的な建造物であった。



図 2-65 唐門跡
(平成 29 年 1 月 6 日)

2代藩主光圀時代に建築され¹⁴⁾、大正 10 (1921) 年に修繕が行われた。大正 12 (1923) 年の関東大震災で傾き¹⁾、昭和 2 (1927) 年までに支柱を用いた補修や両側築塀の補修が行われたが³⁴⁾、昭和 20 (1945) に戦災で焼失した¹²⁾。

2) 棕櫚山

大泉水より東南にあり、マツ、スギ、モミの類が生い茂る中にシュロが多く生えていたために棕櫚山と名付けられた³⁾。4代藩主宗堯の時、実父松平頼豊により見はらしを良くするために大半が伐り払われるまでは、喬木が生い茂る深い森となっていたとされている³⁾。6代藩主治保の代には樹木が回復し再びシュロも見られるようになったが^{12) 15)}、昭和 20 (1945) 年の空襲で樹林が焼失した¹²⁾。現在は再度復旧し、シュロを主体とする特徴的な景を楽しむことができる。



図 2-66 棕櫚山
(平成 29 年 2 月 4 日)

3) 木曾川・寢覚の滝

本園南東側にある木曾川は、2代藩主光圀の代に既に存在したとされ、木曾谷とも呼ばれていた²⁾。

寢覚の滝は6代藩主治保の頃の絵図¹⁶⁾や、文政 9 (1827) 年の史料¹⁵⁾にも見られる。

現在は内庭の池水が寢覚の滝より木曾川に落とされている。江戸期の庭園構成要素として現在も残り、木々に囲まれた静かな空間の中で溪流のせせらぎを楽しむことができる。



図 2-67 木曾川・寢覚の滝
(平成 29 年 1 月 6 日)

4) 白雲嶺

棕櫚山の南にあり、木曾川を渡り、鬱蒼とする森の頂上にある高台である。高台に上れば、はじめて白雲の行きかう様子を見ることができ、遠くは妙義、榛名の山々が、目前には赤城築土の社等が見えたとされている¹⁵⁾。

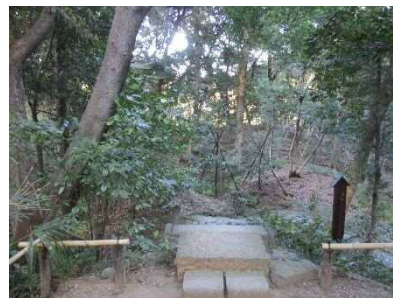


図2-68 白雲嶺（平成29年2月4日）

5) 大泉水

本園の中心にある池であり、作庭初期に徳大寺左兵衛により築造された⁷⁾。本園を楽しむ回遊の中心であり、池の中央には蓬莱島・弁天堂・徳大寺石がある。本園を構成する最も重要な要素である。

形態については元禄年中の地震や享保年中の地震・水害等の天災に伴い、享保年間に大泉水周辺の奇岩等が取り払われ、大泉水の形状と、水の流れが変更された²⁾。



図2-69 大泉水
（平成29年1月6日）

6) 蓬莱島

蓬莱島は大泉水中央に浮かぶ中島であり、傍らには作庭時に徳大寺左兵衛によって立てられた徳大寺石がある。

江戸初期の蓬莱島には弁財天のほかには瀑布があったとされる²⁾。当時は砂洲があり、ソテツが多く植えられた蘇鉄山や、三保の松原を模した三保崎があった¹³⁾。

元禄16（1703）年の地震により崩れて池中に沈み、形態が変化した²⁾。大正12（1923）年の関東大震災では徳大寺石が周囲の7つの組石と共に池中に倒壊したが、昭和4（1929）年頃までに復旧された¹⁾。



図2-70 蓬莱島・徳大寺石
（平成29年1月6日）

7) 龍田川

本園南西部にある龍田川は光圀時代に既に存在したとされる²⁾。この川の景は楓の紅葉の名所である奈良の竜田川に見立てられ、両岸には紅葉が多数植栽されたが、享保年間に大半が伐採されたこともあった²⁾。

水は、現在は西湖の堤から龍田川へ流れ、暗渠を通じて木曾川に至り、流末から循環されている。

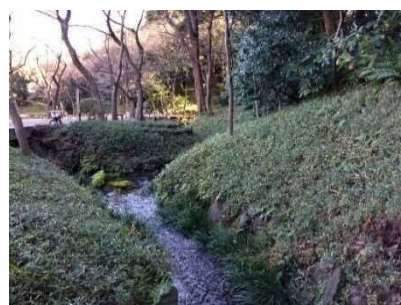


図2-71 龍田川
（平成29年1月6日）

8) 蓮池

大泉水の西方にかかる石橋の西側に位置する小さな池であり、護岸石積みに崩れが生じたため、平成 27 (2015) 年に石橋と共に修復が行われた。池一面にハスが植えられており、開花時期には来園する人々の目を楽しませている。



図 2-72 蓮池 (平成 28 年 7 月 19 日)

9) 白糸の滝・沢渡り

大泉水の北側に位置し、滝下にある流れを横断するため、沢渡りが設けられている。

白糸の滝は 6 代藩主治保の史資料に登場するが¹⁶⁾、近年の発掘調査から、滝の築造以来複数回改修されてきたことが判明しており、詳細な築造時期や位置については不明である。元禄地震で崩壊した蓬莱島の瀑布の景を補うものとされる説もある¹²⁾。

大正 12 (1923) 年に関東大震災で滝の石組が崩壊したが、昭和 2 (1927) 年に滝付近の陥没補修、昭和 4 (1929) 年頃に滝の改修と池畔の石組が改修された^{1) 34)}。近年、経年劣化や度重なる改修により白糸の滝が均等に落水しないという不具合が生じており、現在、修復事業が行われている。



図 2-73 白糸の滝
(平成 29 年 1 月 6 日)

10) 大黒山

大泉水の北側、白糸の滝東側の築山であり、初代藩主頼房時代には既に存在したと考えられる²⁾。かつては大黒堂という建物があり、大黒天を祀っていた。堂の近傍の大木には 2 代藩主光圀が幼少の頃に小刀で「大黒」の二字を彫刻したとされているが²⁾、現在は堂も大木もなくなっている。

大泉水と菖蒲田の間にあり、現在は喬木が生い茂り大泉水の海の景と菖蒲田や稻田の田園の景を分ける緩衝的役割を果たしている。

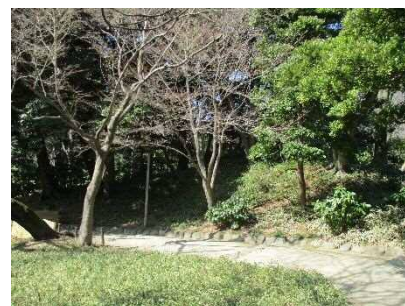


図 2-74 大黒山
(平成 29 年 2 月 26 日)

11) 船着場

船着場は、安政 2 (1855) 年以後の本園の絵図では 5 箇所存在していたことが確認できる²⁹⁾。松原の前方にある船着場 (図 2 - 75) は、湾が掘りこまれ、護岸と石段の形状が残されている。



図 2-75 船着場
(平成 29 年 2 月 4 日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（小石川後樂園）

12) 竹生島

大泉水の東側にあり、鳴門から一つ松、清水観音堂方面に向かう後樂園で最も長い大泉水の眺望線上で、最も手前に見えるのが竹生島である。

文献では綱條時代の宝永火災（1703年）以前に竹生島の名称が登場している²⁾。明治39（1906）年の図には、現在と同じ位置に名称とともに描かれている²⁹⁾。



図2-76 竹生島
(平成29年1月6日)

13) 鳴門

大泉水東側の池尻にあり、水門の囲いとも伝えられている。3代藩主綱條時代には既に存在し、阿波の鳴門を模したとされる²⁾。元禄16（1703）年の地震により初期の鳴門は崩壊した²⁾ものの、明治39（1906）年の図には再び登場している²⁹⁾。

その後、昭和52（1977）年に改修され、現在の姿となっている。大泉水の水は鳴門より暗渠を通し、木曾川を経由し、流末から循環されている。



図2-77 鳴門
(平成29年1月6日)

14) 紅葉林

大泉水の南岸にあり、享保年間（1716～1734）以前には龍田川に沿って楓の大木が植えられ、晩秋から初冬には赤く染まる景の様子が記された記録がある²⁾。その後、4代藩主宗堯時代に見はらしを良くするために大半が伐採されたが、文政9（1827）年には復旧し²⁾、現在も紅葉により赤く染まった景色が来園者に親しまれている。



図2-78 紅葉林
(平成28年11月27日)

15) 枝垂桜

大泉水西側の芝庭にあり、明治時代末期には既に存在したが、昭和20（1945）年に空襲による焼夷弾を被弾した。昭和39（1964）年頃に枯死寸前の枝垂桜を引き継ぐ形で現在の枝垂桜が植えられた。

涵徳亭門（西門）入口からの来園者を迎える位置にあり、花期は本園のシンボリックな存在として景観要素のひとつとなっている。



図2-79 枝垂桜
(平成29年3月29日)

16) 一つ松

大泉水から西側にあり、木の形状は異なるものの²⁾ 唐崎の松を模したとされている⁷⁾。作庭時、既に松は古木であったとされる²⁾。

3代将軍家光は本園の作庭の際、この松の下に座して作庭を指図したと伝えられており、2代藩主光圀は特にこの松を大切にし、枝一本とも切らなかつたとされている。現在の松は作庭時より代を変えながらも、作庭意図を受け継いでいる。



図2-80 一つ松
(平成28年10月13日)

17) 松原

大泉水の北側にあり、元文元(1736)年の記録に、当時既に樹齢百年余りの高木であったとの記録があり、当時は赤松で構成されていた²⁾。大泉水北側から東側にかけて数百の松が空を覆い、3代将軍家光が褒め称えた佳景であり、3代藩主綱條はこの景を保全するために心を尽くして松の手入れを行ったとされている²⁾。

享保年間には、見晴らしをよくするためマツの下枝が刈られた。この時、老木は枝を刈らなかつたが、雪や雹等の影響により枯死してしまった²⁾。その後も残った松の枯死は相次ぎ、クロマツが植栽されて現在の松原となった。

昭和39(1964)年には、枯死寸前になっていた松原の保護や、施設の整理が行われた。現在、往時よりも松が植えられている範囲は狭まったものの、大泉水北側にその景を見ることができる。



図2-81 松原
(平成29年1月6日)

18) 弁財天

作庭当初には既に蓬莱島に弁財天があつたとされ²⁾、江戸時代には船で参拝されていたとの記録がある¹⁵⁾。

昭和2(1927)年に補修が行われている³⁴⁾。



図2-82 弁財天 (平成29年2月4日)

19) 帛橋 (幣橋)

大泉水の南側にあり、龍田川から大泉水につながる流れにかかる石橋である。幣帛の形に模して作られたとの記録があり²⁹⁾、6代藩主治保の時代に描かれた絵図で確認できるが¹⁶⁾、詳細な記録は残されていない。



図2-83 帛橋
(平成29年2月4日)

20) 駐歩泉

9代藩主斉昭時代に龍田川の一部が暗渠化され、斉昭が西行堂付近の龍田川の柳陰清泉の景を初代藩主頼房及び2代藩主光圀の遺勲とともに称え、駐歩泉と命名された。斉昭の自筆により「駐歩泉」と書かれた石碑が立てられ、斉昭夫人によりその故事を記した歌碑が刻まれた²⁹⁾。碑は、現在も西行堂跡に残っている。



図2-84 駐歩泉（平成29年3月24日）

21) 石橋

大泉水西側に架かる石の橋。大正12年（1923）の関東大震災で崩落したが¹⁾、昭和13年（1938）までには復旧された²⁵⁾。

平成23（2011）年の東日本大震災により石橋の両端の護岸に歪みが生じたが、平成27年（2015）に蓮池護岸と共に修復した。



図2-85 石橋（平成27年7月）

22) 丸屋

大泉水の北西側にあり、2代藩主光圀時代には既に存在し、田舎の酒店の嗜好で暖簾に丸を染めてあったとされる²⁾。

大正12（1923）年の関東大震災で柱が崩壊、屋根が倒伏した¹⁾。その後、昭和34（1959）年に九八屋と共に再建された²³⁾。昭和52（1977）年に茅屋根の葺替え等修復工事が行われ、平成25年（2013）に建物を修復している。



図2-86 丸屋（平成29年1月6日）

23) 九八屋

大泉水の北東側にあり、6代藩主治保の前の時代は酒屋と呼ばれていた。享保年間後の記録では、夫婦を象った人形を店番として置き、表には酒屋であることを示す杉玉をかけていたとされる⁷⁾。治保時代以降には、酒を飲むに昼は九分、夜は八分にすべし、酒のみならず万事控えめになすを良しとの意から九八屋と名付けられた⁷⁾。

昭和19（1944）年に戦災で焼失したが¹²⁾、昭和34（1959）年に再建された²³⁾。昭和52（1977）年に茅屋根の葺替えが行われ、平成25年に解体修復工事が行われている。



図2-87 九八屋
（平成29年3月24日）

24) 赤門

本園の東側にあり、奥には錦春稲荷がある。赤門が記された史資料は少なく、詳細は不明である。

平成 23 (2011) 年の東日本大震災の影響や、経年劣化により袖塀等に歪みが生じ、平成 26 (2014) 年に修復された。修復時に発見された釘などの部品から判断すると、現在の赤門は明治時代以降に建てられた可能性が高いことがわかった。



図 2-88 赤門
(平成 29 年 1 月 6 日)

25) 異形燈籠

松原の南、大泉水東側に置かれた大きな御影石の燈籠であり、四角の台座上に四角の火袋と笠、九輪形の宝珠がある。

長橋のたもとを照らすための灯籠であったとの説もある⁷⁾。

大正 12 (1923) 年の関東大震災で倒れ、火袋が破損したものの修復され¹⁾、現在も同じ姿を見ることができる。



図 2-89 異形燈籠
(平成 29 年 2 月 4 日)

26) 瘞鷄碑

異形燈籠から鳴門へ向かう途中にあり 7 代藩主治紀が幕府より賜った 1 羽のタカが 8 代藩主斉脩の代に死に、先代の治紀が遺愛したこのタカを本園内に埋めた際に立てた碑である²⁹⁾。

碑には文政 2 (1819) 年に斉脩が記した書が刻まれており²⁹⁾、「撫育の恩は飛べばすなわち誉にあずかる、遺愛の深さは草木が青々と茂る如く深い」と、今に伝えている。



図 2-90 瘞鷄碑
(平成 29 年 2 月 4 日)

② 通天橋・大堰川・渡月橋・西湖の堤を結ぶ河川の景観ゾーン

27) 大堰川・沢渡り

本園の西側にあり、3代将軍家光の好みを取り入れ作庭当初に築造され、京都の名所、桂川上流の大堰川を見立てたものである²⁾。家光がこの付近の作庭指図をする際に手巾を掛けた松の故事が遺されている他²⁾、家光が腰掛けたとされる石が大堰川中央に「腰掛石」として語り継がれる等²⁹⁾、家光の所縁が色濃く残されている。

享保年間には大堰川の蛇籠が既に整備され、9代藩主斉昭時代は天明4（1784）年までに補修した記録が残されている。大正2（1912）年に大堰川両岸が補修され、翌年に通天橋から大堰川の沢渡りに至る小径を復旧し¹⁾、現在に引き継がれている。



図2-91 大堰川・沢渡り
(平成29年1月6日)

28) 屏風岩

屏風岩は6代藩主治保の時代に「樟の化石」という名称で存在し⁷⁾、大正12（1923）年の関東大震災で倒伏した¹⁾。その後、復旧され、現在もその特徴を残している。



図2-92 屏風岩
(平成29年2月4日)

29) 音羽の滝

作庭当初に徳大寺左兵衛により小廬山付近に築造された²⁾。京都の音羽山の景を表現したとされ、その向かいの山に水車を用いた揚水を滝として落とし、大堰川に流した²⁾。

元禄16（1703）年の地震で滝が崩壊し、水車等の給水施設が失われたことにより水が枯れたままであったが²⁾、大正期の発掘により再びその存在が認識された^{1) 7)}。



図2-93 音羽の滝
(平成29年2月4日)

30) 西湖の堤

2代藩主光圀時代に朱舜水の意見により造られたとされる。中国の西湖の堤を模しており、白蓮が多く植えられていた²⁾。日本の庭園で最初に西湖の堤が表現されており、本園を歴史的かつ景観的に特徴付ける重要な庭園構成要素の一つである。

最も古いとされる本園の絵図には「コケノツツミ」となっており、当初は現在の直線上ではなく、渡月橋とされる「ハシ」で涵徳亭に通じる園路構成であり、大堰川と西湖の堤の間の幅が広く設けられていた¹³⁾。後に渡辺幸庵（1711年没）が実地の見聞と図面をもとに作り直したとされている¹²⁾。

関東大震災で被害を受け¹⁾、昭和2（1927）年に復旧補修が行われている³⁴⁾。

現在、堤は園路としての使用はされていないが、観賞の対象としてその姿を見ることができる。



図2-94 西湖の堤
(平成29年1月6日)

31) 桃山形燈籠

涵徳亭の北側、芝庭から渡月橋へ向かう途中にあり、円形の笠が載った特徴的な燈籠である。大正12（1923）年に関東大震災で倒れたが、後に復旧されている¹⁾。



図2-95 桃山形燈籠
(平成29年2月4日)

32) 渡月橋

本園西側に位置する土橋で、大堰川下流に架かる。

2代藩主光圀の代には渡月橋が存在していたとされ²⁾、3代藩主綱條の代に描かれた絵図にも存在するが、「ハシ」という表記があるのみである（図2-7）。

関東大震災による被害は明らかではないが、昭和2（1927）年に復旧補修された記録がある³⁴⁾。昭和52（1977）年にも改修がなされ、現在も回遊路として利用されている。



図2-96 渡月橋
(平成29年1月6日)

33) 通天橋

大堰川の上流に架かる橋であり、京都の通天橋を模したとされている²⁾。大堰川一帯を京都の景色を表現するための要素の一つとしているほか、江戸後期における本園の形態確立を示す重要な要素の一つである。3代藩主綱條時代の頃には石橋として存在し¹³⁾、現在のものの原形は通天橋の名称が登場する5代藩主宗翰時代初期までに築造されたと考えられる⁷⁾。

昭和2（1927）年には、橋板より上の部材を新規木材に取り換え、欄干部分も補修された³⁴⁾。昭和37（1962）年頃に架け替えられている³⁵⁾。



図2-97 通天橋
(平成29年2月4日)

③ 清水観音堂・小廬山・得仁堂・円月橋・愛宕坂・八卦堂・小町塚等の山中の景観ゾーン

34) 琉球山（富士山）

渡月橋から清水観音堂に至る途中の高台であり、その頂上から麓に向かって扇形に白い琉球ツツジが植えられていた²⁾。遠くからこの高台を見ると雲をまとった富士山のようなため、富士山とも呼ばれたとされている⁷⁾。

現在も渡月橋から清水観音堂に至る途中の高台として残り、大堰川から西湖の堤までの全景を眺めることができる。



図2-98 琉球山
(平成29年2月4日)

35) 小廬山

本園の西側にあり、作庭当初につくられた。

寛永17(1640)年に初代藩主頼房の求めに応じた林道春が、この一帯を中国の廬山を彷彿とする佳景として小廬山と命名した⁴⁾。以来、ササ山の景色は本園の見所の一つとなり、頂上からは大泉水を一望できる。



図2-99 小廬山
(平成29年2月4日)

36) 愛宕坂

本園の北側にある築山を登る急な直線状の石段であり、上には八卦堂跡がある。元禄13（1700）年頃の絵図には既に描かれており¹³⁾、愛宕坂を男坂と称し、緩やかな曲がり道を女坂と称した。京都の愛宕山を模したとされている⁷⁾。

現在は直接上ることができないが、別園路にて上った愛宕坂の頂上から、菖蒲田・稲田の景と周辺の景色を見渡すことができる。



図2-100 愛宕坂
(平成29年2月4日)

37) 小町塚

八卦堂跡より東側にあり、常陸の小野より産出した石であることから、小町の碑と名付けられた²⁾。後に小町塚と呼ばれるようになるが²⁹⁾、小町塚について書かれた史資料は少なく、詳細は明らかになっていない。

古くより八卦堂の傍にあり、現在も見ることができる。



図 2-101 小町塚
(平成 29 年 1 月 6 日)

38) 得仁堂

2代藩主光圀が建立し²⁾、園内で唯一、江戸時代から現存する建物である。光圀が18歳のころ、史記の伯夷伝を読んでその義に感じ入り、堂を建て伯夷・叔斎の像を祀ったとされる⁷⁾。堂は、孔子が伯夷・叔斎を評して言った「求仁得仁」から得仁堂と名付けられた⁷⁾。その後、名称が八幡堂と改められたこともあったが、文政9（1827）年に再び得仁堂とされた。

平成 24（2012）年から平成 25（2013）年にかけて解体修復工事が行われている。現在、伯夷・叔斎像と螺鈿の机は東京都建設局東部公園緑地事務所に保管されている。

本園最古の建築物として、庭園に深い趣を与えている。



図 2-102 得仁堂（平成 25 年）

39) 円月橋

2代藩主光圀が朱舜水に造らせた、中国の技術を取り入れたアーチ型の石橋で²⁾、水面に映る形が満月のように見えることから「円月橋」と名付けられた²⁹⁾。3代将軍家光はこの橋を見て吹上御庭にも同様の橋を造らせようとしたとされる²⁾。本園の特徴を示し、かつ庭園史的にも極めて貴重な石造物である。

度重なる災禍にも耐え、現在に残されている。平成 23（2011）年に高欄と踏板部分の修復工事が行われている。



図 2-103 円月橋
(平成 29 年 1 月 6 日)

40) 立ち手水鉢

本園の北側、愛宕坂から八卦堂跡へ向かう途中にあり、角柱のように背の高い手水鉢が段上の石畳まで伸びた、珍しい手水鉢である。

6代藩主治保時代に描かれた絵図に登場するが、詳細な記録は残されていない。



図 2-104 立ち手水鉢
(平成 29 年 1 月 6 日)

41) 清水観音堂跡

琉球山より北側に進んだ高台、大堰川一帯を一望することができる位置にある。作庭当初に徳大寺左兵衛により音羽の滝近くに建立された堂である⁴⁾。京都の清水寺を模したとされ²⁾、大堰川上流の京都の景勝地の描写という、本来の作庭意図を生かすためには欠かせない建築物であり、本園の修景としても重要な建築物であった。

大正 10 (1921) 年に修繕されたものの、大正 12 (1923) 年の関東大震災で焼失¹⁾、現在は礎石のみ残る。



図 2-105 清水観音堂跡
(平成 29 年 2 月 4 日)

42) 萱門跡

本園の西側につくられた裏門であって、5代藩主宗翰時代は一般人の通用門として²⁾、上水の取水場、いわゆる水車楼等の区域と境界をなす箇所にもなっていた。

団体休憩所がある広場と一線を画する上でも有効な位置にあり、江戸時代から残る遺構である。

2代藩主光圀時代には萱門の前身となる建物が存在し²⁾、宝永年間までには門から外側に番所が設けられていた⁷⁾。昭和 20 (1945) 年の戦災で焼失¹²⁾、現在は柱礎石と、3段の石段のみが残る。



図 2-106 萱門跡
(平成 29 年 2 月 4 日)

43) 八卦堂跡

本園の北側にあり、光圀が学問の神である文昌星を祀り、自ら政治を考え、文学を好むきっかけとすべく建てた八角堂と言われており、当初は文昌堂と呼ばれていた²⁾。また、当初は屋根の上に剣形の飾りが設けられていたが、元禄 15 (1702) 年の桂昌院の本園来訪に際して屋上の剣形も作りかえられ、宝珠となった²⁾。享保年間には4代藩主宗堯の実父松平頼豊により金比羅大将が祀られた²⁾。大正 10 (1921) 年に修繕が行われたが¹⁾、大正 12 (1923) 年の関東大震災で焼失¹⁾、現在は基壇と基礎のみ残る。



図 2-107 八卦堂跡
(平成 28 年 10 月 8 日)

学問推奨拠点でもあった八卦堂には多くの学者や識者が訪れたとされる²⁾。光圀由来の由緒ある建物であると同時に、作庭意図を示す要素としても重要なものである。

④ 稲田・菖蒲田・梅林等東北部一帯の田園の景観ゾーン

44) 神田上水跡

本園北側を東西に流れる。江戸初期の都市基盤施設の遺構としても重要であり、往時の庭園形態を残している要素の一つである。3代将軍家光が作庭当初に上水として本園東側より南の大泉水に引水させた²⁾。

明治29(1896)年に上水の給水が廃止され、本園内に神田上水の跡を残すのみとなった。大正2(1912)年に円月橋より東に流れる部分の改修が行われ¹⁾、平成22(2010)年に史資料を参考にして護岸石積が修復された。



図2-108 神田上水跡
(平成28年10月8日)

45) 不老水

稲田の近傍にある不老水は光圀時代に既に存在したとされる²⁾。いかなる渴きにも枯れず、雨の後にも水かさ増さずとされ⁷⁾、その謂れより不老の水と称された。石を穿って井桁として代用しており⁷⁾、現在も枯れることなくその水をたえている。詳細に記した史資料は残されていない。



図2-109 不老水
(平成29年2月4日)

46) 稲田・菖蒲田

松原より北側にあり、2代藩主光圀が民の辛苦を公家出身であった3代藩主綱條の夫人その他に知らしめるために造り、座して春秋の耕作を觀賞したとされる²⁾。当初この付近には稲荷が祀られ、田端稲荷として収穫物を奉納したとされる⁷⁾。

現在は稲田及び菖蒲田が残り、稲田は近隣の小学生が植えつけから刈り取りまで参加し、体験の場として利用されている。藩主の思想を反映した稲田は江戸大名庭園の中でも珍しく、田園の景として本園を特徴付けるものであるとともに、江戸時代の庭園構成要素として現在に残る貴重なものである。



図2-110 菖蒲田・稲田
(平成28年10月8日)

47) 藤棚

稲田・菖蒲田付近に設えられた背の低い藤棚である。2代藩主光圀時代には既に存在していたとされるが、その長さは53間あったとされ⁷⁾、位置が異なる。9代藩主斉昭時代までに藤棚が現在の位置に移され、天保年間には神田上水より北側に紫の藤棚2基、南側に白の藤棚3基が設けられ、花房が上に向いていることから上り藤と賞される見所であった²⁹⁾。

昭和2（1927）年に補修が行われ¹⁾、現在に至っている。



図2-111 藤棚
(平成28年4月29日)

48) 梅林

本園北側にあり、もとは琴画亭から北側の大池があったが、明治29（1896）年までに砲兵工廠の工場建設のため池を埋め立てる等の景の改変がなされた。この一帯は明治初年頃より植栽され、梅林内に四阿を建て、来園者の休息所となっている²⁹⁾。昭和2（1927）年に梅林の補修が行われている。

『梅種記』には、9代藩主斉昭が江戸から水戸に梅を送ったとあり、本園内もしくは水戸藩邸内に梅があったと考えられるが、その詳細は不明である。

現在の梅林は水戸市の偕楽園より移植されたものであり、「里帰りの梅」として来園者を楽しませている。



図2-112 梅林
(平成29年2月4日)

49) 八つ橋

菖蒲田の中にある八つ橋は伊勢物語の和歌をもとに造られたとされ、2代藩主光圀時代には既に設けられている²⁾。享保年中に廃れ、9代藩主斉昭時代までに稲田・菖蒲田とともに復旧されたものの、位置は当初の位置より異なる。神田上水から水を引き、杜若等が植えられた。



図2-113 八つ橋
(平成29年1月6日)

50) 石橋

梅林と不老水の間を通る神田上水跡を渡る石の橋である。由来や履歴等の詳細な記録は残されていない。



図2-114 石橋
(平成29年1月6日)

51) 琴画亭跡

梅林の南側にあった建物跡である。江戸初期は河原書院があり、能舞台が設けられ、能や饗応の場として利用されていたが、享保7（1722）年に焼失し、その後4代藩主宗堯により琴画亭として建立された⁷⁾。琴画亭は中国・唐時代の詩人の句より名付けられ、鶴等が飼われ、菊花壇や畑があったとされている⁷⁾。明治時代初期には一度消失し¹⁾、明治39（1906）年までに梅林の四阿として再建されたものの²⁹⁾、昭和20（1945）年の戦災で再度焼失し¹²⁾、現在は跡として残されている。



図2-115 琴画亭跡
(平成29年1月6日)

⑤ 芝生広場（涵徳亭側庭門内広場）の景観ゾーン

52) 芝庭

大泉水より西側にあり、もとは涵徳亭と大泉水を視覚的に分断する築山だったが、明治13（1880）年5月に涵徳亭が移築及び改築された際に均された⁷⁾。昭和2（1927）年には平庭風の林泉を意図した芝庭が整備された¹⁾。

現在は西側入口より大泉水に出る玄関口であり、明るく開かれたこの一帯からは小廬山、大泉水、紅葉林等を一望でき、新たな庭園の要素としての役割を担っている。



図2-116 芝庭
(平成29年5月19日)

53) 枯滝

芝庭から西行堂跡へ向かう途中にある枯滝は、玉石による水路の排水まで設けられているが、水は枯れている。由来や履歴等に係る記録は残されていない。



図2-117 枯滝
(平成29年1月6日)

54) 陽石

芝庭の松の下にある凸型の奇石は陽石といわれている。由来や履歴等に係る記録は残されていない。



図2-118 陽石
(平成29年2月23日)

55) 陰石

大泉水の南西側、枝垂桜の近傍にある凹型の奇石である。
由来や履歴等の詳細な記録は残されていない。



図2-119 陰石（平成29年2月23日）

56) 水掘れ石

芝庭から渡月橋へ向かう途中にある石である。
由来や履歴等に係る記録は残されていない。



図2-120 水掘れ石（平成29年2月23日）

57) 飾手水鉢

芝庭から渡月橋へ向かう途中にある手水鉢である。
由来や履歴等に係る記録は残されていない。



図2-121 飾り手水鉢
（平成29年2月23日）

58) 涵徳亭

作庭初期から大堰川の岸边に存在する。障子に当時極めて希少な硝子を用いていたことから、江戸中期までは「ペイドロ（硝子）茶屋」と呼ばれていたが¹⁾、享保年間に林信篤により涵徳亭と命名された¹⁾。

明治13（1880）年5月に移築及び改築がなされ、会議室が増築されたが¹⁾、その翌月に全焼した⁷⁾。明治14（1881）年に異なる意匠で再建されたものの⁷⁾、大正12（1923）年の関東大震災で再び焼失し⁷⁾、昭和13（1938）年に再建された¹²⁾。

その後、昭和60（1985）年に全面改装が行われ²³⁾、現在はレストラン、集会室等として利用されている。現在に残る涵徳亭は洋式の板の間を取り入れた和風建築である。江戸期の山間の水辺の亭舎の趣とは異にするとされているものの、作庭当初とほぼ同じ位置にあり、名所大堰川に張り出した庭園建築らしい意匠を維持し、明治以降の庭園利用形態の大きな変化に対応している。



図2-122 涵徳亭
（平成29年2月4日）

59) 西行堂跡

本園の西側にあった江戸初期の建築物であり、江戸期の回遊順路としても挙げられている本園の重要な庭園構成要素である。作庭当初に建立されたとみられ、西行法師の木像を祀った草深い堂であった²⁾。三方吹き放しで後方は壁の堂であったが、大正 12 (1923) 年の関東大震災にて堂の柱が崩壊、屋根が倒伏、像が焼失し¹⁾、後に改修されるも昭和 20 (1945) 年の戦災で再度焼失した¹²⁾。現在は基壇と入口の両脇に獅子のみが残る。



図 2-123 西行堂跡
(平成 29 年 1 月 6 日)

60) 雪見燈籠跡

芝庭の南側、芝庭と枯滝の間に位置する。かつては雪見燈籠があったが、平成 10 (1998) 年に倒壊した。



図 2-124 雪見燈籠跡 (平成 29 年 2 月 23 日)

⑥ 入口広場（涵徳亭側庭門外広場）の景観ゾーン

61) 鉄鉢型手水鉢

涵徳亭門（西門）付近の通用口から涵徳亭と西湖の堤側に入ると、鉄鉢型の手水鉢がある。由来や履歴等に係る記録は残されていない。



図 2-125 鉄鉢型手水鉢 (平成 29 年 2 月 23 日)

⑦ 内庭の景観ゾーン

62) 内庭中島・石橋

内庭の中央にあり、内庭を構成する主要な要素である。内庭は、うちの御庭と呼ばれ、貴賓は水戸藩邸よりこの中島と石橋を通り、唐門をくぐって本園に入った¹⁵⁾。天保 3 (1832) 年頃に中島の形状及び石橋の位置が変更されたとの記録がある⁷⁾。

現在は中島へは渡ることができないが、北側に整備された園路により内庭を回遊することができ、様々な角度から中島を眺めることができる。



図 2-126 内庭中島・石橋
(平成 29 年 2 月 4 日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（小石川後樂園）

63) 内庭池

内庭の中央にあり、内庭を構成する主要な要素である。天保3（1832）年頃に池護岸等が一部改変され⁷⁾、明治4（1871）年頃に砲兵工廠によって池の北側が埋め立てられ、現在の形状となった（図2-12）。

昭和13（1938）年に小石川後樂園として開園されるまでに池の北側に園路が整備され、内庭を回遊することができる形状となった（図2-16）。平成25（2013）年に池護岸を修復し、現在に引き継がれている。



図2-127 内庭池
（平成29年2月4日）

64) 旧東門跡

内庭の南東にあり、もとは錦春門として唐門北側袖壁に隣接して設けられていたが、大正10（1921）年2月に内庭の南東隅に移築され、東門と改められた¹⁾。昭和20（1945）年の戦災で焼失し¹²⁾、現在は基壇のみが残っている。



図2-128 旧東門跡
（平成29年1月6日）

第Ⅱ章の記載に用いた文献

- 1) 文部省. 名勝調査報告第3輯. 1937年. 陸軍省資料. 国立国会図書館所蔵
- 2) 東京市. 東京市史稿 遊園篇第1. 後樂園紀事・後樂園築造. 1936年. 東京市編
- 3) 東京市. 東京市史稿 遊園篇第1. 後樂園築造事蹟. 1936年. 東京市編
- 4) 東京市. 東京市史稿 遊園篇第1. 小廬山記. 1936年. 東京市編
- 5) 東半七郎. 造園研究 第25号. 後樂園の公開に至るまで. 1938. 西ヶ原刊行会発行
- 6) 江戸図屏風右隻. 1634年頃. 国立歴史民俗博物館蔵
- 7) 田村剛. 後樂園史. 1929年. 刀江書院発行
- 8) 前島康彦. 東京公園史話. 1989年. 東京都公園協会発行(都市公園NO.11)
- 9) 中根金作. 宮廷の庭・大名の庭. 1996年. 講談社発行
- 10) 文京区神田上水遺跡調査団編. 神田上水石垣遺構発掘調査報告書. 1991年.
- 11) 江戸の町(上) - 巨大都市の誕生 -. 内藤昌. 1982年. 草思社発行
- 12) 吉川需. 小石川後樂園. 1981年. 東京都公園協会発行(東京公園文庫28)
- 13) 水戸様小石川御屋敷御庭之図. 1703年以前. 明治大学博物館蔵
- 14) 富田清貞・牧野和高撰. 西山遺事(吉川需著小石川後樂園収録). 1981年.
- 15) 坂昌成. 後樂園の記. 江戸名園記. 1826年. 甫喜山景雄発行
- 16) 山内勝春. 後樂園之圖. 1855~1863年. 徳川ミュージアム所蔵
- 17) 東京市. 沿革図第二. 史蹟名勝小石川後樂園. 1938年. 東京市発行
- 18) 服部勉. 「水戸様小石川御屋敷庭園の図」の考察を中心とした小石川後樂園の庭園構成について. 1999年. 東京農業大学農学集報第44巻1号
- 19) 中島宏. 小石川後樂園植栽管理のあり方. 2008年. 日本庭園学会誌17
- 20) 文化庁. 小石川後樂園文化庁資料. 年代不詳
- 21) 東京市. 元陸軍造兵廠敷地内神社移転方ニ関スル件. 1937年. 東京都資料
- 22) 東京都建設局. 小石川後樂園修復原調査報告書. 1991年. 東京都資料
- 23) 樋渡達也. 小石川後樂園と浜離宮恩賜庭園. 2001. 公益財団法人東京都公園協会公開講座?資料
- 24) 公益財団法人東京都公園協会. 東京都立文化財庭園維持管理マニュアルの運用について. 2010年. 公益財団法人東京都公園協会庭園維持管理検討会編
- 25) 東京市. 小石川後樂園平面図. 史蹟及名勝小石川後樂園. 1938年. 東京市発行
- 26) 東京都東部公園緑地事務所. 小石川後樂園地形図. 2010年. 東京都東部公園緑地事務所作成
- 27) 藤井英二郎. 見る庭と触れる庭. 1995年. 淡交社発行
- 28) 共和開発株式会社. 春日町(小石川後樂園)遺跡第10地点. 2007年. 共和開発株式会社発行
- 29) 計見東山. 後樂園 全. 1907年. 東京育英社発行
- 30) 公益財団法人東京都公園協会. 「東京都における文化財庭園の保存管理計画書」に基く都立文化財庭園の維持管理の取組み 取組みと実績の報告. 2010年. 公益財団法人東京都公園協会作成
- 31) 文京区遺跡調査会編. 春日町遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点 - 文京区役所庁舎等建設に伴う発掘調査報告書 -. 2000年. 文京区遺跡調査会発行
- 32) 明治天皇紀第3・第6. 宮内省編
- 33) 後樂園ノ一部復舊工事ニ関スル件. 1927年
- 34) 野村次雄. 庭研 no. 165 小石川後樂園記(下). 1977年

上記の典拠文献は全てが本文中に記されているものではない。